◆

ゆらゆらと、彼女はただ歩いていた。
ただ自らが最期に辿り着くべき場所を探して、何も考えることなく、ただひたすらに真っ直ぐに。
いや、何も考えていないと言うと嘘になる。彼女にとって、考えられる事はもう何も無かった。もう、何も、彼女が考えてどうにかなるものなんて、この幻想郷には何一つ残っていないのだ。
「あぁ、考えるのも空しいわね……」
彼女は、常に孤高の存在であった。気高く、美しく、そして鋭い棘を持つ。唯一無二の美しき幻想郷の花。
彼女は、ただ最強であればいいと願った。この幻想郷の中で自分が一番強ければ。ただそう願い続けていた。それは過去に起きたとある事件から。
それは、彼女の領域を誰にも侵されない為の事。誰一人として、彼女の一生に、共に寄り添う者を必要としなかった。それを望んでも、得られなかった。
故に、彼女は誰よりも強きを求め、自分の領域を侵させなかった。
もう、どれくらい歩いたのだろうか。彼女が目指していたそれが姿を見せた。
まだかなり遠くに見えるが、それは悠然と立っている。
それは、一本の桜の樹だった。ただの桜の樹ではなく、通常淡い桃色をしているはず

の花弁は、皆一様に淡い紫色をしている。
それは、刈り取られた罪人達の魂を糧に花を咲かせ、そして散らす。かなり特殊なものではあるが、妖怪桜ともいえる。
紫の桜の樹は、あらゆる罪を求め、狂わせ、集わせる。
だからであろうか。彼女、風見幽香がその最期の時を迎える為の場所として紫の桜の樹の下を目指していたのは。
「紫の桜は、軫念の花を咲かせ、追念の花びらを散らす……」
「散った花は長い時間を掛けて土に還り、再び花を咲かせるでしょう」
幽香がぼそりと呟いた言葉に続けて、背後から遠い昔に何処かで聞いた言葉を繰り返す。
「あら、それは遠い昔に何処かで聴いたような気がするわ。よく覚えているわね、閻魔様」
「それは貴女とて同じ事ですよ。もう、あれから何回、回帰の時を繰り返してきたのでしょうか」
そこに立っていたのは、いつかの異変の時にいきなり現れて好き放題に幻想郷の住人に罪を言い渡し、一方的な裁判の果てに贖罪を求め回った閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥだった。
その姿はあの時のまま、寸分と違わない。実際のところ、幽香自身も見た目だけは変わらずにいるが、持てる力の差は歴然だった。最早風前の灯。幽香からは何の迫力も感

じられず、ただそこに立っているだけ。すぐにでも力尽きて倒れてしまいそうなその姿を見て、四季映姫は表情を曇らせる。
「何よ……なんか、ずっと変わってないあんたを見てたらちょっとムカついてきたわ。年老いた私からすると、そんな閻魔様が羨ましくて仕方が無いわ……」
もう話をするのも辛いのか、言葉は所々切れ切れで、覇気もない。
「もう……すぐそこみたいですね。目的はあの桜ですか？」
「あら、話が分かるじゃない。貴女を少しだけ……見直したわ」
そう言って弱々しく微笑む。
それを見て四季映姫は肩を貸す。幽香は最初驚いたような表情を見せたが、何も考えず、彼女に身を預ける事にした。
四季映姫の細身には少し負担がかかるかとも思われたが、身を預けた幽香が思いの外に軽く驚く。それは、彼女の死がもうすぐそこにまで迫っている事だと理解し、また表情を曇らせる。
「あのね……そんなに暗い顔されちゃ気分良く旅立てないじゃない……」
気分良く旅立つ。と言ったものの、それはもう少し先が良かったのか、それともっと早くに旅立てれば良かったのか。そんな事を考える。
結局、いつ死んでも気分良く死ねはしないな。ほんの刹那、思いを巡らせただけでそういう結論に至った。
「……貴女は少し長く生き過ぎたのです。だから、最期が辛いものになる……」

「そうね、確かに長かった。本当に……永かった。あんたの言うとおり、永く生き過ぎたわ」
思わず、溜め息を漏らしそうになる。
何も知らなかった頃の自分は、最期まで孤高であろうと誓った。それなのにどうした。この湿っぽさは。自分の何十年、何百年越しの決意が、こんなにも脆く崩れてしまおうとはあの時には予想もしなかった。というよりも、できなかった。
桜の樹の目の前に立つ。彼女は、四季映姫から身を離すと、ふらふらと桜の樹へと向かう。
きっと、これが私の罪なんだろう。この罪が私をこの桜の樹の下へと運んだのだろう。
それは、ついさっきまで気付く事ができなかった、彼女の最後の罪。それに気付いてしまい、ようやく、この桜を求めた理由と、四季映姫がここへ現れた理由が分かる。
「まったく……最期の最期まで……あんたはムカつくわ」
「でも、気付けずに逝くよりはいいでしょう？」
その問いに、少しだけ考え、「まあ、悪くはなかったわ」と返す。
「では、私はこの辺でお暇します。貴女の最期を邪魔するのも無粋でしょう」
そう言って、四季映姫は紫の桜に、風見幽香に背を向ける。
「……待ちなさいよ」
それは、哀願のような声だった。
「いつもの貴女なら、気付いた罪に罰を言い渡すじゃない。それが……まだ。だから…

…ちょっとだけ付き合いなさいよ」
そう言って、手招きをする。今の彼女の様子に、特別他意は見られず、またそんな余裕がある訳もない事を理解し、それに応じ、彼女の横に座る。
「ちょっとだけ……昔話に付き合って欲しいの。これは私のせめてもの罪滅ぼし。だからもしも聴きたくなければ、無理は言わないわ。これは、私の罪であり、罰なんだし」
「いいでしょう。罪を償おうとする心を持った相手を放って置けるわけもないですし」
そう言って、幽香に微笑を返す。
「ありがとう。感謝するわ。さて、どこから話そうかしら……」